

2

「いらっしやいませーっ!」

シータの声が響く。どうやら客が立て込む時間帯になってきたらしい。うたかた亭 は、メインストリートからは外れているものの、それなりに繁盛しているらしく客の出入りが多い。

「邪魔になるのなら、席を空けるが?」

ガストは徐々に混み合ってきた店内を振り返って、キースに言う。

「よしてくれ。金を払って飲んでる以上、アンタもウチの客には違いない」

キースは苦笑いを浮かべながら、ガストを見もせず酒のつまみを作っている。

「そうか。ならばもうちよっとお邪魔させてもらおう」

「エール酒のお代わりは?」

長居を決め込んでいるガストの引け目を突いてキースが酒を勧める。ぞんざいな言葉遣いと立ち振る舞いとは打って変わって、意外にも商売上手のようだ。

「そうだな。もらおうか」

「まいどあり」

かなり少なくなってしまうたエール酒の中身を一口で空け、ガストはジョッキを差し出した。キースはそれを受け取って、足元の樽から柄杓でガストのジョッキにエール酒を並々と注ぐ。

「店の居心地が悪いわけじゃなけりゃ、毎晩でも売り上げに貢献して欲しいんだがね」

ニヤニヤと笑いながらキースがジョッキをカウンターに置く。

「邪魔にならないんならな」

ガストがカウンターに置かれたジョッキをぐいつと喉に流し込む。

「身体がでかいからって、二人分の場所代を取るわけでもなし」

「身体がでかいから、二人分の酒が入るのさ」

「その分金払って貰えりゃ文句はない」

「おう、もう飲んでんのか」

ガストの後ろから声がかかる。振り返るとそこにはリーバルが立っていた。

「おや、白鎧の師団長殿じゃないか」

「どうやら、キースはリーバルとも顔見知りらしい。」

「久しぶりだな、キース」

「ちよいと東の方に物見遊山に行ってたんでね」

「まあた口クでもない旅だったんだろ」

「仰るとおりで。それより、どこに座る?」

リーバルはガストを見るとニヤリと笑った。

「折角顔見知りがいるんだ。隣に座らねえでどうすんだ」

「へえ・・・ガストと?」

意外そうな顔をしたキースを無視して、リーバルがガストの隣に座る。

「お邪魔します!」

キースの後ろからまだ幼さの残る表情をした娘が顔を出した。人の多い店内でもよく響く声が印象的だ。栗色の髪を後ろでまとめてお団子のようにしている。

「ナナ・ピースピルです。よろしくお願ひします」

ナナは直立不動の姿勢のままガストに敬礼をした。

「よろしく、ガスト・タラスだ」

「こいつあ、まだ戦場に出す前の見習いだけだな、同門で結構腕は立つぞ」
「へえ、同門つてえと七鍵流か？」

キースもナナとは初対面だったらしく、興味深そうにナナを眺めている。

「はいっ！リーバル殿に師事しておりますっ！」

「おめえ、声でけえよ」

「はっ！申し訳ありませんっ！ししよー！」

注意されてもナナの声のトーンは変わりない。どうやら、こつこつキャラなのだろう。リーバルは楽しそうな顔をして困っている。ガストとキースが顔を見合わせて苦笑する。

「で、何にする？」

「エール酒でいいよ」

「そこのお嬢ちゃんは？」

未だに直立不動の姿勢を崩さないナナに向かってキースが声をかけた。

「え？は？はいっ！いただきます！」

こつこつした店には初めてきたのか、ナナは思いっきり動揺しまくってうわずった声でズレた返答を返してきた。これにはさすがにリーバルも苦笑せざるを得ない。

「いや、だから何を飲むかって聞いてんだらうがよ」

「えーと・・・アルコールはダメでありますから・・・ミルクで・・・」

一応この店がどういった店かは把握しているらしく、最後の言葉は尻すぼみになってしまい、聞き取りづらくなってしまっている。

「あいよ。ミルク入りまあす！」

「え？あつ！ちよっ・・・」

キースのわざとらしい声に慌てふためいたナナが、おろおろと周囲を見渡す。視線がナナに集まり、ニヤニヤと笑っている表情が店中に踊っている。それに気づいたナナは顔を真っ赤にしてしゅんとなり、リーバルの横のカウンター席におさまった。問題のキースの姿は見えず、どうやら奥の部屋へ料理や酒の準備をしに向かったらしい。

「で、非番だとはいえ、随分と早く飲んでるじゃないか？」

リーバルがガストの酔い具合を計りながら聞いてきた。ジョッキの中に入っているエール酒は先ほどお代わりをしたばかりで、さほど減っていない。リーバルはガストの呼気に混じっているアルコールの香りでガストの酔い具合を判断しているようだった。

「ここのキースとは、ラムシユタインに入る時に一緒に国境越えしてな」

全く関係のないような返事に、リーバルの表情が一瞬曇る。

「そんな時から胡散臭いヤツだとは思っていたが、情報通の酒屋の主人としてここで再会してからは、例の話について色々話を聞いて貰っている」

「なるほど。タラス傭兵団くわいのレベルともなるとさすがに仕入れる情報の精度は高いか」

「ま、師団長の所に売り込みを掛けたのも、キースの入れ知恵なんだけどな」
ガストの言葉にリーバルの表情が明るくなる。

「なるほどなるほど。そういうことか。ようやく納得いった」

リーバルがガハハと笑いながらガストの異様に広い背中をバシバシと叩いた。

「まだ酔っには早いぜ旦那。エール酒の一滴も飲んじやないない」

キースがミルクを片手に奥の部屋から顔を出した。

「酒を一滴も飲まずとも、この店の仕掛けは後からじわじわ効いてくるからな」

「はて。何の事やら」

キースが苦笑しながらナナの前にミルクを、リーバルの前にはエール酒を置く。キースは多くなつた客に対応すべく、再度奥の部屋へと引つ込んだ。

「ま、とりあえずだ。今日も一日お疲れさん」

リーバルが自分のジョッキを掲げる。ガストもナナも自分の飲み物を手に取り、リーバルのジョッキに軽く打ち付けた。

「一口でジョッキの半分を飲み干して、リーバルがうまそうに口を袖で拭った。」

「うまっ！」

ダンツという音をたててジョッキをカウンターに置く。

その向こう側ではナナが所在なげにミルクをちびちびと飲んでいる。

「で？その後何か分かったか？」

リーバルが真剣な表情でガストに話かける。

「いや、大した成果はない。人相書きをさつきキースに見せたところだ」

「キースは何か言っていたか？」

「・・・いや、何も」

「そうか・・・」

あのキースの反応は何だったのか？なぜキースがこの人相書きの人物について隠し事をしなければならぬのか？あれがガストの勘違いでなければ、金さえ払えば情報を売ってくれる情報屋の態度とは思えない。不自然だ。

リーバルは、ジョッキを傾けながら奥の部屋に居る筈のキースを見遣った。その態度にもガストは引っかけかりを感じる。国境越えの際にフォービス騎士団に詰問された際、意外にもすんなりと釈放された。あの時、なぜかキースだけが騎士団の隊長の幕舎へと呼び出された。そしてリーバルの今の態度だ。キースとは一体何者なのか？ガストの中に疑問が湧き上がってくる。

「あら？」

リーバルの声に我に返ったガストは、リーバルがナナのいた筈のカウンター席を向いていることに気づく。さつきまでそこでミルクをちびちびと飲んでいた筈のナナがいない。

「おいっ！一体どういうことなのか、説明をしていたらこーじゃないですかっ！」

ナナの声が右斜め後ろから聞こえてきた。振り返るとナナが先ほどやってきていたジェスターメントの帝国騎士に絡んでいる。

「あらー、アルコール耐性がゼロだったのか・・・」

カウンターの向こうからキースがナナを見てつぶやいた。どうやらキースは悪戯心でミルクにアルコールを混ぜていたらしい。

「このソルバークスの都が、テロ騒ぎれみんな不安がつてる中、ろーしてジェスターメントの宰相さんの視察を取りやめにしないんれすかっ！」

ナナに絡まれている騎士が困惑した様子で周囲に助けを求めようとしている。

リーバルが背後からナナを羽交い締めにした。

「どーも、済みませんねえ。こいつ、酔っぱらってるみたいで」

「ししょーっ！なんれ止めるんですかっ！」

リーバルに羽交い締めにされて身動きの取れないナナはじたばたともがきながら、なおも文官に食って掛かるうとしてている。

そうだ。そうなのだ。正体不明のテロリストが跋扈している今のソルバークスに、視察を敢行しようとしているように見えるジェスターメントの態度。ジェスターメント側にどれほどの事情があるうとも、誰の目から見ても不審に写る筈だ。

「このバカタリ！おめえのやつてることは十分に国際問題に発展すんだよ！」

リーバルの言い分もつともな話だ。普段はふざけていて、こつこつた騒ぎにも火に油を注ぐような性格をしているリーバルにも、事の大きさが分かるだけに神経を使っているようだ。

「国際もんらいが何らうていうんれすかっ！人としての道筋が国際もんらいとやらに劣るとれも言うんれすかっ！」

ここまでくると、最早意味不明だ。そもそも、危険をおして視察に来るジェスターメントの

宰相の姿勢が、人としての道筋から逸れているのかと問われると、誰もが理論的に破綻しているとしたか答えようがないだろう。

「人としての道筋が大事なのはよくわかった！だからな、おめえはちつと静かにしとれ」

リーバルの右腕が目にも止まらぬ早さで動いたかと思うとナナの鳩尾に吸い込まれていった。ナナはきゆうという可愛らしい声を立ててリーバルの腕の中に崩れ落ちた。常人の目にはリーバルの腕の動きなど見えるわけもなく、ナナがいきなり酔いつぶれたのだと見えるに違いない。

「どーも、済みませんねえ。悪酔いさせちまつたみたいで」

リーバルが周囲に愛想笑いを振りまきながらナナを引きずってカウンターに帰還した。

「スマン・・・」

キースが素直に詫びた。

「おめえなあ・・・」

リーバルが何かを言いかけて溜息を吐いた。ナナをカウンター席に座らせて器用にずり落ちないように姿勢を形作る。

「しばらくほっとくか」

リーバルは自分の席につくと、ジョッキを手にして一気にエール酒を飲み干した。

正体不明のテロリスト、トレアの誘拐、ジェスターメントの宰相の視察、何もかもが重なりすぎている。ガストはそう思いながらエール酒の入ったジョッキを傾ける。果たしてこれは偶然か？それとも・・・

「きやははははははは」

聞き覚えのある嬌声にガストが我に返ると、シートが気絶しているナナの顔に落書きをしていた。ナナの顔はいつの間にか劇画のような濃く太い眉毛に、三白眼の怪しげな人物へと変貌を遂げていた。